昭和初期における公共図書館児童サービスの形成

佐伯信男
（金沢大学・大学教育開放センター）

はじめに

わが国における公共図書館児童サービス[1]は，明治20（1887）年10月に大日本教育会書籍館が小学部を設けたことに始まる，といわれている[2]。

大阪府立図書館は，明治37（1904）年の規則で，入館者の資格を「年齢十二歳以上」と定めていたが，実際にはそれ以下の者すなわち児童も入館を許され，一般閲覧人とともに図書においても施設においても区別なく利用していた，と報告されている[3]ように，他のいくつかの公共図書館でも，制度化されない形で児童が図書館サービスを享受していた形跡がある[4]。

しかし，明治から大正の中頃まで，児童用図書という観念が定まっていなかったので，「大正10年ごろ，その学年その年齢の少年少女たちに向けての適当な読物が出版されていないため，ぼくらは，背のびして大人の読物を読まざるをえなかったのです」と，井野川潔が発言している[5]ように，児童のための図書が少なかったことが公共図書館児童サービスのいちばんの隘路であった[6]。

明治20年代に萌芽した児童用図書の刊行は，その後，明治43（1910）年，小川未明の「赤い船」の発表となって開花し，のちに文芸童話とよばれる開明的な児童用図書の発刊の水路を拓（ひら）く結果をもたらした。そして，大正2（1913）年，実業之日本社が島崎藤村，田山花袋，徳田秋声，与謝野晶子，野上弥生子らに託して愛子叢書シリーズを刊行し，やがて大正7（1918）年の童話・童謡雑誌「赤い鳥」の出現へと，質的，量的な隆盛の道を歩むこととなった。

他面，大正自由主義の風潮にのって，さまざまな進歩的教育運動が興ったが，それらの拠点となった成城学園，玉川学園，成蹊小学校などの私立学校や各地の師範学校付属小学校では，学校に図書館を設けて，文芸童話を中心にした課外の

読書指導に力を注ぎ，教育界に刺激を与えて読書教育を高揚させる成果を生んで，図書館児童サービスに対する一般の理解を広めるなりゆきとなった。

1．公共図書館児童サービスの伸長

公共図書館の児童サービスは，前述のような前史を基盤に，昭和年代に入って量的な伸長をみせることとなった。すなわち，昭和3（1928）年から数年間，まず佐賀県立図書館の開館があったのち，今上天皇の即位式典を契機として，鳥取県立図書館をはじめ多くの即位記念公共図書館が設置をみ，そのほとんどが児童室を備えて児童サービスを展開することとなった。

こうして，主要な公共図書館において，児童，小・中学生の図書館学習が表1にみるとおり，注目に値する増加を示したのである。[7]

ただし，その増加のすう勢は，公共図書館の所在地によってかなりの格差がみられるようである。おおざっぱにいって，都会と農山村で違いがあり，都会とりわけ大都市において児童（小・中学生）の図書館学習者は顕著に増加している。そして，さらに，地方にあっても，農山村より中・小都市において児童の図書館学習は伸長していると推測されるのである。[8]

この傾向は，この時期の児童の図書館学習が，私立学校などの斬新な自由主義教育観に裏づけされていて，それらがいち早く流布したところが大都市であったことの反映であろうが，他面，その実質を形成した文芸童話などの児童用図書が，当時の出版・図書流通機構の実情もあって，地方の農山村では現実に確保しがたかったことにもよると考えられる。

2．公共図書館児童サービスの生涯教育上の意義

公共図書館が開かれると，まず来館するのは児童である，といえなくもないほど，表1でみられる日比谷図書館，大阪府立図書館，長野県立長野図書館，西宮市立図書館などの例のように，開館直後には全学習者の中で占める児童の比率はすこぶる高いのである。[9]

どの府県でも，本を読みたがる児童がひとつの公共図書館の児童室を満杯にするに十分な人数だけ存在するのだろう。これらの児童に対する「公共図書館の児童部の諸活動は」「常に其の中心を児童の読書趣味の涵養に置く」べきことをすでに大正元（1912）年の時点で説いたのは，当時東京市立日比谷図書館の館長の地位に在った今澤慈海である。その今澤は，ある条件の下にではあるが，「普通閲覧[10]

表1　主要な公共図書館における学習者中児童，小・中学生の占める比率（昭和初期まで）

ア．府県立図書館（またはこれに準ずるもの）

	日比谷図書館			大阪府立図書館			新潟県立新潟図書館			佐賀県立図書館			長野県立長野図書館		
	総数A (人)	児童B (人)	B/A (%)	総数A (人)	児童B (人)	B/A (%)	総数A (人)	児童B (人)	B/A (%)	総数A (人)	小・中学生B (人)	B/A (%)	総数A (人)	児童B (人)	B/A (%)
明治37	—	—	—	93,022	無職又は職業を明記し難いもの 約26		—	—	—	—	—	—	—	—	—
41	21,043	4,698	※22.3	135,663	8,576	6.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
明治45 大正元	205,345	16,537	8.1	152,897	11,492	※7.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大正4	169,394	18,103	10.7	167,926	9,298	5.5	—	—	—	40,934	3,532	8.6	—	—	—
7	176,826	29,936	16.9	182,469	11,756	6.4	159,398	33,429	21.0	123,838	24,586	19.9	—	—	—
13	389,712	33,185	8.5	417,729	不詳		※327,812	60,802	18.5	244,389	62,870	25.7	—	—	—
大正15 昭和元	464,667	24,010	5.2	426,776			299,501	54,297	18.1	229,320	40,565	17.7	—	—	—
昭和3	〔昭和2年〕437,427	26,416	6.0	397,710	△12,338	3.1	220,940	48,600	22.0	241,397	48,632	20.1	—	—	—
5	361,105	30,872	8.5	400,790	△14,290	3.6	245,331	54,465	22.2	326,797	※98,763	※30.2	103,739	13,103	※12.6
7	不詳	〔昭和6年推定〕37,486		376,426	△9,109	2.4	207,030	54,730	26.4	357,218	8,746	2.4	※119,523	10,271	8.6
9	不詳	不詳		397,864	△12,345	3.1	233,515	※84,775	※36.3	331,042	9,350	2.8	114,767	9,014	7.9
11	280,129	34,059	12.2	※443,706	不詳	—	245,915	72,869	29.6	※371,896	9,236	2.5	104,404	※11,347	10.9
13	159,040	27,508	17.3	423,274	△18,751	4.4	219,632	77,776	35.4	以下資料なし			93,125	8,355	9.0
15	以下資料なし			380,479	△24,996	6.6	200,567	56,291	28.1				71,212	8,527	12.0
17				342,910	△21,099	6.2	192,797	49,075	25.5				51,728	5,469	10.6
開館年	明治41年			明治36年			大正5年			大正3年（昭和4年，県立に移管）			昭和4年		
（出典）	大正9年以前は，「東京市立日比谷図書館一覧」，大正10年以降は，「東京市立図書館と其事業」第48号，第59号第62号，第70号			大阪府立図書館五十年史略および大阪府立図書館年報（△印は巡回文庫のみ）			新潟県立新潟図書館50年史（1965），p．194			佐賀県立図書館六十年のあゆみ（1973），p．304			県立長野図書館三十年史（資料20）		

（注）1．※印は，その図書館での開館以来のピークの数字である。
2．学習者数は，特記しない限り＜館内＞＜館外＞の合計で，巡回文庫は含まれていない。

イ　市立図書館

	名古屋市立鶴舞図書館			大阪市立図書館（6館）			東京市立図書館（20館）			西宮市立図書館		
	総数A(人)	児童B(人)	B/A(%)	総数A(人)	児童B(人)	B/A(%)	総数A(人)	児童B(人)	B/A(%)	総数A(人)	児童B(人)	B/A(%)
大正12	118,806	24,726	20.8	414,724	128,416	31.0				—	—	—
13	233,547	52,279	21.5	443,436	131,022	29.5	1,414,880	295,211	20.9	—	—	—
大正15 昭和元	239,552	57,402	24.0	545,797	177,009	32.4	2,112,006	235,158	11.1	—	—	—
昭和3	249,100	65,624	26.3	515,615	153,678	29.8				14,536	4,173	※28.7
5	※277,623	※76,313	※27.5	448,323	143,215	31.9				45,137	10,527	23.3
6	262,703	70,113	26.7	467,161	164,252	35.2				51,697	※11,695	22.6
7	244,684	65,671	27.1	428,052	145,914	34.1				※51,826	10,721	20.7
9	229,458	59,090	25.8	475,906	188,355	39.6				43,411	4,962	11.4
11	220,042	54,058	24.6	534,506	※218,208	40.8	2,028,910	413,396		43,130	3,348	7.8
13	211,156	54,051	25.6	387,192	171,958	※44.4	1,806,018	426,130		45,680	4,778	10.5
15	224,262	56,316	25.1	298,406	132,175	44.3				40,092	734	1.8
17	201,936	40,407	20.0	—						37,801	—	0
18	156,284	32,109	20.5	—						36,505	—	0
開館年	大正12年			大正10年			（明治41年）			昭和3年		
備考				6館とは，阿波座，西野田，滑水谷（ただし昭15休館），御蔵跡，今宮，城東の各館。ただし，大正13年までは，4館。 総数(A)のピークは，昭2で，約61万である。			日比谷図書館を含む。大正10年に麹町図書館の設置によって，全部で20館となった。					
（出典）	名古屋市鶴舞中央図書館50年史 P. 114～115			大阪市統計書第22回～第39回（大正14～昭17）			「東京市立図書館と其事業」第48，59，70の各号			西宮市立図書館三十年史（1958）P.35		

注 1. ※印は，その図書館での開館以来のピークの数字である。
2. 学習者数は，特記しない限り，<館内><館外>の合計で，巡回文庫は含まれていない。

表2　日比谷図書館における児童の学年別・図書類別学習傾向（昭和8年4月中）

(%)

	性別	小学校 尋常1年		小学校 尋常2年		小学校 尋常3年		小学校 尋常4年		小学校 尋常5年		小学校 尋常6年		高等科 小学校等1年 中等学校1年		高等科 小学校等2年 中等学校2年		合計	
童話	男	100	100	96.3	91.0	83.7	87.0	69.5	75.6	37.3	49.7	18.4	24.3	22.6	24.8	14.9	17.9	29.2	38.2
	女	100		87.5		90.9		83.5		72.0		38.1		32.0		34.1		59.0	
小説	男	—		—		1.6	0.9	2.8	1.6	24.5	18.1	17.8	19.8	28.2	32.8	43.0	42.0	26.2	23.7
	女	—		—		—		—		6.6		24.4		48.0		36.5		18.0	
歴史	男	—		—		3.4	1.7	4.8	2.7	8.4	6.1	17.2	12.7	5.2	4.4	7.3	7.1	8.7	6.7
	女	—		—		—		—		2.5		2.0		2.0		5.9		2.0	
伝記	男	—		—	1.5	4.9	2.6	5.7	5.4	8.2	7.8	13.4	12.4	16.1	13.2	12.4	11.4	11.7	9.8
	女	—		2.5		—		5.1		7.2		9.6		3.0		4.7		5.6	
地理	男	—		—		—		—		2.6	1.9	5.8	4.5	3.4	2.8	1.8	1.5	2.9	2.2
	女	—		—		—		—		0.5		1.4		1.0		—		0.6	
理科	男	—		—	3.0	1.6	0.9	2.9	3.8	4.1	2.8	7.6	7.8	5.2	4.2	4.8	5.0	4.9	4.6
	女	—		5.0		—		5.1		0.5		8.2		1.0		7.0		3.6	
算術	男	—		—		—		—		0.3	0.6	3.5	3.1	1.5	1.2	0.9	0.7	1.3	1.1
	女	—		—		—		—		0.1		2.0		—		—		0.7	
国語	男	—		—	1.5	1.6	1.7	1.0	0.6	1.2	2.0	1.8	2.6	3.1	2.3	1.1	1.3	1.7	1.9
	女	—		2.5		1.8		—		3.6		4.8		—		2.4		2.5	
修身	男	—		—	1.5	1.6	1.7	7.6	6.0	3.8	4.3	5.5	4.7	4.6	4.5	4.9	4.5	4.7	4.3
	女	—		2.5		1.8		3.8		5.1		2.7		4.0		2.4		3.5	
その他	男	—		3.7	1.5	1.6	3.5	5.7	4.3	9.6	6.7	8.7	8.1	10.1	9.8	8.9	8.6	8.7	7.5
	女	—		—		5.5		2.5		1.0		6.8		9.0		7.0		4.5	
合計	男	100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0	
	女																		

(注)　調査の対象となった児童の学年別・性別の人数は次のとおりである。

	小学校 尋常1年	小学校 尋常2年	小学校 尋常3年	小学校 尋常4年	小学校 尋常5年	小学校 尋常6年	高等科 中等学校1年	高等科 中等学校2年	合計
男	17	44	69	138	610	490	402	644	2,414
女	11	33	48	48	270	190	183	139	922
計	28	77	117	186	888	680	585	783	3,336

（出典）東京市立図書館と其事業　第65号（昭9.3月），P.13

室に備付くる如き図書」等をも「児童室にも使用せしむること」を述べている。[10] つまり，児童用図書の刊行がまだ少なかった状況の下とはいえ，成人用の図書でもよいとし，後にその目標を「子供の想像能力や演劇的歓喜の感能や，名誉及正義の感能を開拓するところに在る。これらは単なる知識の啓発より遙かに価値ある特質である。」と特記するのである。[11]

こうした考え方は，自由主義思想を踏まえ，児童中心主義教育観に共鳴する教育家や作家の考え方と呼応するものであった。だから，すでに自由主義思想は退潮ぎみであったとはいえ，それに基く教育運動の実践の余燼がなおくすぶる昭和8（1933）年の時点にあっても，今澤の衣鉢を襲（つ）いで日比谷図書館の責任者の地位に在った廣谷宣布は，「積極的な意味に於ては，進歩主義教育の当然の帰結として，又消極的の意味に於ては悪書払除の最善最適の機関として，児童図書館は」ゆるがせにできないと述べ，[12] 文芸童話を中心とした児童サービスの充実に努力を傾注したことであった。

その結果であろうが，昭和8年4月中の日比谷図書館の児童用図書の利用は，表2にみるとおり，「童話」と「小説」で60％を超える比率を示すまでになっている。

ところで，児童サービスの対象を日比谷図書館の基準に従い，小学校尋常科1年から高等科2年までとすれば，その子どもの発達の格差は大きい。表2でみるなら，手段性学習[13]とみてよいと思われる「理科」や「国語」や「修身」は，高学年になるほど比率が高まる傾向をみせている。

このような手段性学習に対する援助や児童の発達段階に対する配慮については，まず，渡辺徳太郎が，「児童閲覧の目的を，単に修養の為めの読書（cultural reading）及び娯楽の為めの読書（recreational reading）丈けではなく，之に加ふるに，職業の為めの読書（vocational reading）を鼓吹し度いと思ふのであります。」と説いた。[14] そして，「児童の内より職業の為めの読書習慣を涵養して，初めて成人となり職業に就きて後も，永く図書館を利用する様になることが出来る」のであって，そうしなければ「比較的少数の学生，研究者，娯楽者，の利用機関」であった「図書館の舊態を改めることが出来ない。」と図書館のあるべき将来像の実現にかかる効用をもあわせて主張した。[14]

この時期，「教育は一生涯に亘る過程」と唱え，学校外教育を通俗教育の観念から，社会教育の観念に深めることに貢献した川本宇之介が，「人は」，「学校卒業後と雖も出来るだけ長く其の教育を継続せねばならない。否一生涯之を継続すべきである。又之に必要な施設機関は国家が之を備えねばならない。」と説き，[15] ピッツバーク図書館長リートの“学校より図書館へ卒業する”との言を引用しながら，

図書館をその「必要なる施設機関」の第一に挙げたのは[15]，この渡辺の考え方に通底するものがあるといえよう。

しかし，もし図書館学習を生涯学習の一環として適切に捉えるのなら，児童の発達段階に配慮し，自己教育力の基礎である読書能力の着実な伸長を図るため，適時に適書を提供する工夫が要請される。この要請に応えてであろうが，日比谷図書館は，昭和8（1933）年に，文部省の委嘱によって万国婦人子供博覧会に出陳する児童用図書を，小学校の学年の区分に従って選びだしたのであり[16]，この試行は発達段階の観念を導入した最初であろうと思われる。とはいえ，選ばれた児童用図書を少し吟味してみると，やはり今澤一廣谷の考え方が勝っており，児童の自己教育力の伸長を図る意図は，顕著には汲みとれないのである。

児童の各種の能力を伸長させる教育技術の工夫については，やはり学校教師の思考と実践に負うところが大きい。

山口県阿武郡明木村立図書館は，明木村立尋常高等小学校に付設されているのであり，その運営の衝に当った訓導伊藤新一は，創意に満ちた工夫努力によって全国的に注視を浴びる経営の手腕を発揮したのであるが，図書館の教育機能の核心は選書に在りとし，明確な選書の方針を立てている。そこでは，児童のために，「（丙）児童用図書ノ内容」として，「ロ，児童ノ国語力発達ノ程度ニ適応シ自学自習ニ利便ナモノ，ハ，国定読本ノ補充トナリ擴充トナリ且ツ堅実ナ読書趣味，高雅ナ文学趣味，剛健ナ国民精神ヲ養フニ足ルモノ」と明記している[17]。また，実際に学校図書館を経営した経験を基に，植村長三郎は，「学校書ノ図書選択ハ公共書ノ其レヨリモ更ニ責任ノ重キモノガアルト思ハレル。何故ナラバ読書界ニ入門セントスル年少者ヲ指導シ，彼等ノ生涯的ナル知識ノ基礎ヲ築上スルハ，年少時代ノ読書ニ待ツ所ガ多イカラデアル」と記述し[18]，具体的に，「小学校ノ図書選択」の項で，「1．図書ハ参考利用ノタメ並ニ本人自ラノ読書ノ為ニ学校デ教ハッタ事柄に直接関係ヲ有スルモノヲ選択スルコト」あるいは「4．図書ハ生徒ノ心意デ選択スルコト，例ヘバ平易に理解サレルモノ，多少成人的ノ程度ノモノデ面白イモノ，而モ一般的ノ理性ヲ増進スルモノヲ選ブ」などと基準を揚げている[18]。

ここでは，おぼろげながら，児童の学力あるいは読書習熟度に応じて適書を与えようとする考え方，および成人後の自学自習に期待して，その能力（自己教育力）を啓培しようとの意図が仄見できるのである。

伊藤新一が，その著述で附記しているように[19]，全国の公立(町村立)図書館3,061館のうち，2936館（すなわち約96%）が小学校付設のものと調査で捉えられている状況であれば，大都市のごく少数の図書館は例外として，大半が小学校の教師によって運営されているのが実態である。小学校での教科学習に添った学力を基

準として，児童に適書が提供される指導のありようは，全国的な傾向であると理解されよう。

3．公共図書館児童サービスの実情

東京市立浅草図書館は，大正15（1926）年10月から翌年の昭和2年3月にかけて，館外帯出を行なう児童の保護者の職業を調査したところ，おおよそ表3(ア)のような結果を得た。

表3　東京市立浅草図書館の館外帯出を行なう児童に関する調査

ア．児童の保護者の職業

職業	全数	うち，その最多	内数
総数	1,469		
商工業者	1,194	大工職	42
官公吏・軍人	56		
記者・教員・宗教家	60	僧侶	17
雑業	55	劇場員	13
無職	104	地主・家主	3

イ．児童の帯出の多い図書

順位	書名	著・訳者
1位	リンカーンとワシントン	友納友次郎
2位	馬鹿の小猿	鈴木三重吉
3位	白鳥の騎士	近藤宗男
4位	新訳 アラビヤンナイト	杉谷代水
5位	頼朝と義経	濱田廣介

（出典）東京市立図書館と其事業　第42号(昭2. 11月)，P. 8～9

土地柄を反映して，商店や中・小工場経営者が圧倒的に多く，読書階層とおぼしきものは，「官公吏・軍人」，「記者・教員・宗教家」に「雑業」の一部を加えても，全体の10%に達しない。にもかかわらず，館外閲覧された回数の多い図書の1位から5位までを占めるものは表3(イ)のとおりで，童話や歴史物・伝記などを中心にしてかなり程度の高いものである。[20] いわゆる山手ではなく，いわゆる下町の児童のこの傾向は，地方の図書館にあっても散見される。

例えば，表4は，石川県立図書館の昭和8年度の統計であるが，傾向を同じくしているとみて誤りではあるまい。ところで，この学習者数を月別にみると，表5のとおりで，5月を最高に4月，6月，11月と気候の好いときに図書館学習が

表4　石川県立図書館における児童の図書館学習の傾向

		館内（人）	館外（人）	合計（人）
学習者数	男子	24,374	11,037	35,411
	女子	3,312	941	4,253
	計	27,686	11,978	39,664
				（冊）
利用図書冊数	総記	2,324	25	2,349
	修身・国語	1,378	1,040	2,418
	歴史・地理	4,420	3,835	8,255
	理科・算数	2,075	828	2,903
	童謡・図工・体育	10,968	187	11,155
	産業	3	9	12
	試験	10	—	10
	兵事	1,164	141	1,305
	童話	16,942	5,913	22,855
	計	39,284	11,973	51,262

（出典）石川県立図書館月報　第124号（昭9. 7月），P. 4

表5　石川県立図書館における児童の図書館学習の月別動向

（人）

	館内	館外	合計
4月	3,579	1,135	4,714
5月	3,832	2,856	6,688
6月	2,965	1,701	4,666
7月	2,172	1,153	3,325
8月	1,084	163	1,247
9月	2,563	780	3,343
10月	2,828	1,012	3,840
11月	2,916	1,118	4,034
12月	1,435	707	2,142
1月	699	430	1,129
2月	1,387	624	2,011
3月	2,226	299	2,525
合計	27,686	11,978	39,664

（出典）石川県立図書館月報　第124号（昭9. 7月），P. 4

高まるのは，常識的な推測に合致するとはいえ，児童が余暇を多く持つ夏期，冬期の休日期間中にかえって図書館学習が低下することは，余暇善用の良慣習を児童に植付けたい教育機関としては，工夫の望まれることがらであった。

この観点から，東京市立の各図書館は，夏期休暇中の児童の余暇善用勧奨をめざして，いろいろの創意的な事業の実施を試みた。まず，昭和7（1932）年に，日比谷図書館と麹町図書館は，麹町臨海学園の申込を受け，優良児童用図書約300冊を鎌倉のその施設に持ち込み，36日間児童の閲覧に供するという事業を行なった。臨海学園に参加した7小学校448人の尋常科4年から高等科1年までの児童は，延人員にして3,400人が図書の閲覧をしたという。このようなケースでも，「児童の最も好んで閲覧する図書は，童話，小説，伝記，歴史，神話，伝説等の順位で，修身，地理は最下位となる傾向がある。」とのことである。[21]。次に，これに類するものとして，小石川図書館では，小石川区が虚弱児童の健康増進を図るため，毎年小石川植物園内に設ける林間学校に，同年の夏期休暇中の一定期間に，雑誌13種650冊，図書200冊を持ち込み，読書趣味の涵養を図った。林間学校参加の児童総数9,367人中64％に相当する6,029人が閲覧活動に加わり，自由時間になると多数がいっせいに殺到するといった盛況を現出した。一週間ぐらいで馴染みの児童群が形成され，係員の手伝いを申出たり，お話をねだったりするようになった，と関係者は喜色をこめて報告している。[22]そのほか，京橋図書館では，夏期休暇中，児童室の開館時刻を2時間繰り上げ午前8時からとした。学校を通じて周知を図ったせいもあって，入館児童は，8月1日～10日の間は1日平均83.6人であったのが，11日～31日の間では1日平均138.5人と大幅に増加したと記録されている。[23]また，氷川図書館では，夏期休暇中，氷川小学校（学級文庫）と連絡をとり，「自習室」を開いて読書指導を行なっているし，牛込図書館では，牛込高等小学校が7月中の10日間開催した夏期児童図書室という事業に対し，児童用図書100冊，少年少女雑誌30冊を特別に貸与する措置をとった。[24]

子どもの読書欲は一般に想像されていたよりは遙かに強く，そのうえ家庭環境から推測する以上に内容程度の高い図書が読みこなされることを認めるなら，次に配慮されるべきことがらは図書に対する子どものアクセスを高めることであろう。その一つの手段は巡回文庫である。

すでに新潟県下で積善組合が実施した巡回文庫が多数の児童によって利用されたことは，つとに指摘されているとおりである。[25]佐野友三郎の指導により巡回文庫の先駆をなした秋田県立秋田図書館は，この時期7分館を経営していたのであるが，そのうち大曲分館はとくに巡回文庫に力を注ぎ，サービス領域内の全町村（14町村）にわたって学校をサービスポイントとして，4函編成で1函の1町村

への留置を19日間と定め，これを実施している。そして，その4函の中には，「児童図書」の部門が加えられており，かなり程度の高い書物を繰り入れている。「途中，破損図書も随分あったものと思われる。新書の補充もなかった訳だし，かなり，古い，而もボロボロに近いものであったろう。それでも尚かつ読む意欲に応えて廻されたものであろう。」と記録が残されている[26]。小学校へ送られる巡回文庫は，東京大阪[27]のような大都市でも歴史の古い事業である。例えば深川図書館が，（昭和7年の）「五月二十日より」（深川区）「内小学校を五区に分ち，各校二十冊づつ毎土曜日交換移管閲読せし」めたという記事がみえている[28]ように，さまざまなバリエーションをみせながらも連綿として継続していたとみられる。それゆえ，巡回文庫はいわば届ける学習情報の先駆けとして，農山村のように，住民と学習情報源との地理的距離の大きい環境のもとで制度上の効果を発揮する。例えば，昭和8年度における石川県立図書館の巡回文庫の最大の受益者は，表6をみるならば，行動半径の小さい児童であることが理解できよう。

前述の秋田県立秋田図書館大曲分館の巡回文庫の実績報告に，「当時としては只一つの，無料で見られる文庫として珍重されたものであろう」と附記されている[29]が，本好きの田舎の児童にとってとりわけ切実で有難いサービスであったと思われる。

休暇期間中の特別サービス事業や巡回文庫は，児童と図書の間の物理的，心理的距離の縮少を図る措置と認められるが，図書館サービスを教育・学習援助サービスとして把握し，より十全な機能を果たさせることをめざすなら，そこに人的指導サービスの介在が強く要請されるはずである。それは，児童学習者を単なマスとみるのでなく，一人ひとりの読書能力，読書傾向，学習習熟度，学習レディネスなど性格・個性に根ざす心理状況を捉えたうえで適切な図書を推奨し，提供する働きとなって現出するからである。

『書有ルガ為ニ利益ヲ生ズ』るのではなく，『書ハ之ヲ掌理運転セシムル当事者ノ処置宜シキヲ得テ後初メテ利益ヲ生ズ』[30]との基本的認識に立って，その経営に当った明木村立図書館の伊藤新一は，まさにこういう意味において図書館の人的指導サービスの役割を自覚していたのであろう。

かれは，「農村ノコトデアルカラ平常日ニ於テ態々図書館ニ来テ読書スル人ハ甚ダ稀デアル」[30]と捉え，「余暇ヲ利用シテ新刊図書ヲ陳列シテ親シク現本ニ接セシメル」[30]よう努め，読書する児が増えてくると，「各人別ノ『帯出券』ヲ用意シテオキ」「各個人読書ノ跡ヲ明ニシ，尚積極的貸附ヲナス場合ニ夫等ニヨリテ過去ノ読書傾向ヲ考察」[30]して適書を勧めるまでのサービス活動を継続したのである。自己教育力に乏しい学習者は，こうした手厚い援助サービスを受けて，始めてじぶんの

表6　石川県立図書館の巡回文庫の利用状況(昭和8年度)

学習人員(延数)										
種別		学生	宗教家	官公吏軍人	実業	雑業	職業不明	児童	計	合計
巡回文庫	男	210	591	77	1,206	210	106	4,181	6,581	9,623
	女	15	226	—	276	133	32	2,357	3,042	
専用文庫	男	1,118	2,874	605	8,534	2,821	643	28,882	45,477	78,351
	女	431	1,333	—	1,794	698	243	28,375	32,874	
計	男	1,328	3,465	682	9,740	3,031	749	33,063	52,058	87,974
	女	446	1,559	—	2,073	831	275	30,732	35,916	
合計		1,774	5,024	682	11,813	3,862	1,024	63,795	87,974	
%		2.02	5.71	0.78	13.43	4.39	1.16	72.51	100.00	

利用冊数(延数)												
種別	叢書辞書	宗教学教育	経済社会	法律政治	産業	理学工学	医学衛生		文学語学	歴史地誌	児童	合計
巡回文庫	171	460	376	146	509	172	159	221	1,221	820	6,182	10,437
専用文庫	994	3,255	2,369	831	4,601	1,197	963	1,048	11,169	3,804	55,150	85,381
合計	1,165	3,715	2,745	977	5,110	1,369	1,122	1,269	12,390	4,624	61,332	95,818
%	1.22	3.88	2.86	1.02	5.33	1.43	1.17	1.32	12.93	4.83	64.01	100.00

(注)　送付の文庫個数は320，中味の図書延冊数(文庫1個の冊数×文庫の配送先個所数)は15,838であった。

(出典) 石川県立図書館月報　第124号(昭9.7月)，P.3

学習意欲を顕在化させ，学習活動を活発化させ，その結果として自己教育力を発達させるのである。

ところが，当時の教育界の中核にある人びとは，このような「各個人読書ノ跡ヲ明ニ」するがごとき個別性の尊重にはあまり留意しなかった。一般に，児童の図書館学習に関して，(1)教科書のような真面目な読物から遠ざかり，濫読の弊に陥りやすい (2)発育期にある児童には，図書館での静座よりはむしろ運動が望ましい といった趣旨の批判が主に学校教育関係者の中で唱えられていた，と伝えられる。[31]

これらの説に反証を挙げようと試みたのが，北条治宗である。昭和7（1932）年に，夏期休日期間の約40日にわたって東京市立下谷図書館に来館した小学校児童を調査し，男児200人，女児100人，計300人の閲覧票を分析して，次の結果を得た。[32]

(1) 学業成績との関連

学業成績	甲	135人	45%
〃	乙	150人	50%
〃	丙	15人	5%

小学校における学業成績別の児童の割合は，甲20%，乙60%，丙20%であるから，図書館には，むしろ学業成績の良いものが，高い比率できている。

(2) 体格との関連

体格健康の優れたもの	(甲)	36.7%
普通健康児	(乙)	56.7%
虚弱児	(丙)	6.6%

小学校児童を体格健康の度で分けた割合は，甲20%，乙60%，丙20%であるから，むしろ，健康優良な児童が多くきている。

身体の弱い子はあまり来館しないが，身体障害を持つ児が毎日のように来た。図書館を「社会の人達が虚弱児の避難所と云うのも此の様な異例が特に目だつからであろうと思われる」と記し，世人の不明を啓（ひら）こうとしている。

それでは，これら東京の公共図書館で児童が学習する図書は，どんなものであったか。昭和11（1936）年に，東京市立四谷図書館が，1か月（開館日数29日）の期間をとって小学校児童と高等小学校・中等学校生徒（1～2年生）について読書傾向を調査した結果は，表7のとおりである。報告の主なところを次に摘記しよう。

「学年別に読書傾向を観ると低学年の一，二年は絵画的のもの，即ち「覧る」ものであって，前述の雑誌・漫画，それに次ぎ純真な「お伽の国」の童話等で，

表7　東京市立四谷図書館における学年別利用図書

学年	修身		童話		地理		歴史		伝記		科学		理科		雑誌，漫画		国語，図画，手工，軍事，参考書		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1年	1	2	21	8	—	—	1	2	8	5	2	—	—	—	45	10	2	3	80	30
2年	5	3	37	43	—	—	2	1	5	11	1	—	—	—	114	64	7	8	171	130
3年	12	6	79	40	—	—	2	3	5	3	2	—	2	—	279	80	3	5	384	137
4年	3	3	45	29	1	—	8	2	14	5	2	—	1	—	222	47	1	3	297	89
5年	1	1	46	33	2	1	8	7	15	7	5	1	—	—	159	52	2	1	238	103
6年	—	1	35	55	—	—	6	2	8	7	3	2	1	1	96	61	3	2	152	131
高等科1年 中学1年	1	—	28	10	—	—	2	—	3	1	2	—	—	—	64	11	4	1	104	23
高等科2年 中学2年	—	—	19	6	—	—	1	—	4	1	2	1	—	—	38	33	1	—	65	41
学籍なし	1	3	16	17	—	—	1	1	3	9	4	—	—	—	41	50	1	4	67	84
計	24	19	326	241	3	1	31	18	65	49	23	4	4	1	1,058	408	24	27	1,558	768

(注)　児童・生徒の対象実人員は999人である。

（出典）四谷図書館「児童の読書傾向と住所調」：東京市立図書館と其事業　第69号(昭和12年2月)，p．11。

他に殆ど挙ぐべきものはない。高学年に進むにつれ文章的，即ち「読み」ものになる。童話はよくこれを観察して見ると，所謂お伽噺的なものから近代的文，即ち小説と云った形式のものが比較的多く読まれている。伝記図書は概して高学年に進むにつれて多く要求されているようである。

……（中略）……性別の上からは，多少の相違はあるが，男子は殊に科学・理科・地理等が多く，女子はこれに反し，修身・童話・歴史等が多く読まれる。」

「次に学年別閲覧人員に於ては低学年と高学年は少く，両者の中間の学年が多い傾向を示している。一年二年と漸然的に増加しているが，殊に三年から急激に増し，これから反対に向い四年五年と高学年に進むに従って，更に高等科等に至っては一層減少している。[33]」

また，麹町図書館が，同年に，麹町区の夏期臨海学園に加わった児童について調べた読書傾向は，表8のとおりであり，「幼年書」や「文学」が圧倒的に多く読まれている。選書され持ち込まれた図書での「童話」「小説」の比率は38％程度であるのに，閲覧の比率では，それと覚しき図書の比率が，49.6％に達している。

この二つの調査でみる限り，学校の教科に即した図書が，よく閲覧されているとはいえないし，また公共図書館側も，そのようなサービスをよく行なっていた，とはいえない。

そこで，公共図書館の児童サービスと学校図書館（当時の用語でいえば，学級文庫または児童文庫）の関係が問題となる。この点についても，北条治宗は，「自学自習は学級文庫からとまで潮に乗った施設であったが，昨今では殆んど顧る人さえまことに少き時勢になった。」とし，「学級文庫にあっては栓事指導で一つの学年程度の本ばかりと定められ，その学科の補助的にとの立場から学科に適したものを厳選した参考図書の蒐集であった。[34]」と，学校教育の枠に拘束される欠陥を指摘したうえ，「学級文庫とは変り，前期中期後期の児童の好む所をよく考えて蒐集し，児童の知識の庫として，校内生徒の公共心の修養場たらしむるよう，そして読み物を主にし，参考書類を貸し出し用とし，不断の自学自習場たらしめるのが児童文庫の使命である。[34]」と，学校図書館（といっても，公共図書館と併用であるが）に公共図書館の社会教育機能を持ちこむことを提言した。北条の考えで注目すべきは，「前期中期後期の児童の好む所をよく考え」と児童の発達段階ないしはその好みに配慮する視点が表われていることである。この点でも，先駆者伊藤新一は，つとに，「1．尋1，2　コノ時代ノ児童ニ対シテハ読ミ方時間ナドデ，絵本類，幼年画報等ノ取扱方ヲ実物ニ就イテ親切ニ話シ聞カセテソレラ実習サセル」，「2．尋3　コノ学年ニナルト，教室文庫，一部分ノ図書ニ限ッテ1人1日1冊宛家庭へ持チ帰リヲ許スノデアルガ，其ノ取扱方ニツイテヨクヨク指示シナ

ケレバナラナイ」,「3．尋4　コノ学年デハ図書ノ案内ヲ為シ与エテ児童ノ読書ヲ欲スル心ヲ唆ルノデアル」,「4．尋5　辞書ノ引キ方ヲ授ケテ盛ニ辞書ノ使用ヲ奨励スルノデアル」,「5．尋6　各種図書ノ解題ヲ与エテ図書選択ノ手引ヲナスコトヤ,諸学科ノ調べ方ノ指導及ビ年鑑類ノ利用法ヲ授ケテ学習ニ利用サセル」,「6．高1　雑誌ノ作リ方及ビ見方ヲ授ケルコトヤ，読書法ノ大要ヲ知ラセルノデアル」,「7．高2　日刊新聞ニツイテ其ノ種類，特徴，読方ヲ授ケテ新聞ノ概念ヲ一層深メ且ツ代表的雑誌ノ特徴ヲ知ラセ，雑誌ノ選択並ニ読方ヲ導クノデアル」[35]と，詳細に児童・生徒の発達段階に即した読書ないし図書館利用の指導方法を力説している。

表8　東京市麹町区夏期臨海学園児童図書室における読書傾向

分類		前期		後期		合計
理科	男	15	1.3%	37	3.0%	52
	女	6	0.5	3	0.2	9
修身	男	40	3.5	48	3.9	88
	女	18	1.6	28	2.3	46
工学	男	6	0.5	29	2.4	35
	女	—	—	—	—	—
文学	男	227	19.9	345	28.0	572
	女	339	29.7	266	21.6	605
歴史，伝記	男	79	6.9	105	8.5	184
	女	43	3.8	44	3.6	87
一般書	男	16	1.4	42	3.4	58
	女	36	3.2	18	1.5	54
幼年書	男	59	5.2	108	8.8	167
	女	256	22.5	158	12.8	414
計	男	442	38.7	714	58.0	1,156
	女	698	61.3	517	42.0	1,215
総計		1,140	100.0	1,231	100.0	2,371

（備考）前期は，麹町，東郷，富士見の各小学校，後期は，番町，永田，日比谷の各小学校(高等科を含む)が参加した。

（出典）東京市立図書館と其事業　第69号(昭12，2月)，P.12，13

むすび

公共図書館を拠点にして，児童サービスの研究と実践を積み重ねていた図書館員は，その経験に即して，教科書から離れた自由読書の教育的意義と，それを効果あらしめるためには児童ひとりひとりの個性と発達段階に着眼して指導すべきことに目覚めつつあったといえよう。しかし，時代の潮流は逆の方向に変わり始める。当時の表現でいう日支事変の勃発に始まる時局の緊迫化は，国民精神総動員運動から国民をうって一丸とした聖戦の完遂へと人心を動かせ，自由読書の消極化，文書教育という形態での国民思想の統合という図書館教育のすう勢は，上述の新しい児童観に基盤を持つ運動の発展の可能性を狭ばめ，やがて，ふたたび，学校の教科に基く図書館学習を重視する考え方を強めることとなった。

しかし，熱意溢れる図書館員たちの試行は，戦後の新しい図書館運動を開花させうる土壌を，来るべき時期のために深耕した働きとして，今日改めて評価すべき貴重な資産であると思えるのである。

〔注〕

(1) ふつう「児童図書館」という語が使われているが，本稿では，機能に重点をおいて論じるので「館」という建物を連想させる語を避け，竹林熊彦が「児童図書館の史的研究」(『土』第29号（昭和28，10月）p 4）でいう「児童に対する図書館奉仕」の観念を採って，この用語とする。

(2) 竹林熊彦「大日本教育会書籍館㈡」(『図書館雑誌』第31年 7 号（昭12，7月）P197)，なお，京都府立図書館は明治38（1905）年から児童室を設け，無料で開架の自由閲覧のサービスを始めた，と伝えられる（前掲の「児童図書館の史的研究」p 5）。

(3) 大阪府立図書館五十年史略（昭28年　11月）p25

(4) 北嶋武彦は，「明治三六年七月開館した山口県立山口図書館は，新聞雑誌閲覧席と同室であるが，児童室を設け，小規模ながら自由接架式を採用した。」と記している（「戦前における児童図書館運動」『学校図書館』第136号（昭37，2月）p26)。

(5) 学校図書館　第136号　p12

(6) とはいえ，明治43（1910）年 2 月に発せられた文部大臣訓令「図書館ノ施設ニ関スル訓令」は，「図書館設立ニ関スル注意事項」の中で，「図書館ハ」「教育ノ効果ヲ収ムルコトニ努メ」「子弟ヲシテ幼時ヨリ所劣ナル書籍ヲ手ニ

セサルノ習慣ヲ養成セシムヘシ」と訓じ,「成ルヘク児童室，……(中略)……等ヲ設クルヲ便トス」と教示したので,宮城県立,京都府立，東京市立日比谷，大阪府立，奈良県立，石川県立，鹿児島県立などの図書館がそれぞれあいついで児童室を設け，児童サービスを始める動きが高まってきていた。

(7) 一般の図書館学習者も表aでみるとおりこの時期かなり増加しているので，全学習者中に占める児童の比率は安定している。

(8) 山形県の小関栄助は，人口5万以上の市のものを大図書館と，人口1万内外の町のものを中図書館と，人口3千ないし5千の町村のものを小図書館と，仮に呼称するとして，昭

表a．昭和前期における公共図書館学習者の増加傾向

年　　度	学習者数
大正15(1926)年	20,964千人
昭和 2(1927)年	22,165
昭和 3(1928)年	22,847
昭和 4(1929)年	22,835
昭和 5(1930)年	23,355
昭和 6(1931)年	24,979
昭和 7(1932)年	24,766
昭和 8(1933)年	24,949
昭和 9(1934)年	24,668
昭和10(1935)年	24,202
昭和11(1936)年	24,126
昭和12(1937)年	24,551
昭和13(1938)年	24,158
昭和14(1939)年	24,086
昭和15(1940)年	24,973
昭和25(1950)年	11,488

(出典) 文部省「学制百年史(資料編)」，昭和47年，P. 449～450(261～262)による

表b．図書館の規模別にみた学習者の属性別比率(山形県)

(%)

職　業	性	大	中	小
学　　生	男	64	50	5
官 公 吏	男	1	1	3
教　　員	男	1	2	6
実　　業	男	7	23	63
其 の 他	男	17	5	5
学　　生	女	8	13	8
其 の 他	女	2	6	10
合　　計		100	100	100

(注) 「学生」には，小・中学生を含んでいる。

(出典) 図書館雑誌，第26年　第2号(昭7. 2月)，P. 36

和7（1932）における県内の図書館学習者の職業別比較をなして，表bを示している。

(9) 東京市立日比谷図書館一覧（自明治四十一年至明治四十二年）には，「開館後の景況は頗る良好にして……（中略）……殊に児童閲覧室の如きは土曜，日曜，祭日等にありては定員の数倍乃至十数倍の人員を収容せざるべからざるの盛況を呈しつつあり」との記述がみえている（小河内芳子「東京市立図書館の児童室(一)」，『書研究』復刊第3号 p.2参照

(10) 今澤慈海「児童と図書館」（『図書館雑誌』第16号（大正元年6月）p11）

(11) 今澤慈海，竹貫直人共著「児童図書館の研究」（東京博文館　大正7）p98

(12) 廣谷宣布「児童図書館の問題」『東京市立図書館と其事業』第64号（昭8，3月）p 2

(13) 拙論「図書館の教育性の史的考察（上）」（拙著『社会教育論Ⅰ』所収）で，キー概念として提示した「手段性重視の考え」に基いた学習をいうのであるが，ここでは，本文にいう「職業の為めの読書」や卒業後の自学自習を可能にする自己教育力を培う学習（読書活動）を指している。

(14) 渡辺徳太郎「児童閲覧の重要性」（『図書館雑誌』第120号（昭4，11月）p283）

(15) 川本宇之介「社会教育の体系と施設経営（体系篇）」（北文館　昭6）p204

(16) 東京市立図書館と其事業　第64号（昭8，3月）p 8～9

(17) 伊藤新一「町村学校書経営，実際」（『書研究』1930――Ⅳ p13）

(18) 植村長三郎「学校書経営概論」（『書研究』1931―Ⅳ p35）

(19) 伊藤新一「町村学校書経営ノ実際」（間宮商店，昭.6）p15

(20) 調査の対象となった児童の一人池田福松（高等科1年）は，感想文で，「又勉強ばかりしてもたのしみがなくてはならない，童話にしても，何々作り方にしろ，皆一つづつのたのしみであって，僕の考えではそこが図書館のとくしょくであると思ふ。」と書いていて（東京市立図書館と其事業　第42号（昭2，11月）p8），今澤，廣谷らの考え方を裏づける感想を抱いている者の存在を示している。

(21) 東京市立図書館と其事業　第63号（昭7，11月）p17

(22) (21)の雑誌　p21

(23) (21)の雑誌　p19

(24) (21)の雑誌　p20，21

(25) たとえば，「日本近代教育百年史7（社会教育）」（国立教育研究所　1974年）p544

(26) 秋田県立秋田図書館沿革誌（昭和36年版）p130～131

(27) 大阪府立図書館五十年史略（昭28）は，「明治四十二年……大阪市内各区に亘る小学校，及び府下西成郡から図書の借出の申請あり之を実施した。これが本館の貸出文庫及び巡回文庫の嚆矢をなす」と記している（p22)。

(28) 東京市立図書館と其事業　第63号　（昭７，11月）p23

(29) (26)に同じ

(30) 伊藤新一　前掲書

(31) 毛利宮彦「図書館学綜説」（昭24，同学社），p370

(32) 北条治宗「児童室の御定連調査」，東京市立図書館と其事業　第64号（昭８，３月），p.12

(33) 四谷図書館「児童の読書傾向と住所調」東京市立図書館と其事業　第69号（昭12，２月），p.４，10

(34) 北条治宗「児童文庫の新経営」東京市立図書館と其事業　第74号（昭13，８），p.10，11

(35) 伊藤新一　前掲書（『書研究』1930—VII p.328～９）